

防災力を高めるための防災教育に関する研究
—その7 都心に通う大学生を対象とした
地震に対する意識と行動力に関する調査—

正会員 ○ 山口 裕子*1
正会員 久木 章江*2
正会員 石川 孝重*3
正会員 伊村 則子*4

地震防災 大学生 都市型
防災知識 防災行動 アンケート

§ 1 はじめに

2004年の中央防災会議において、近々東京で大地震が起きる可能性が高まっていることや、その被害想定が発表された。大災害が発生した場合は、市民一人一人の防災意識や行動が、被害の増減に影響すると考えられる。

2003年、東京都区内のキャンパスに通う大学生(N女子大学)を対象に地震防災に関するアンケート調査を行った結果を報告した¹⁾。2004年には同じ都区内ではあるものの、新宿新都心部で高層ビルや地下道に囲まれ、授業も高層階で行われているB女子大学学生を対象に同様のアンケート調査を行った。本報では、調査概要と地震防災の知識・意識・防災対応力についての結果および昨年度のN女子大との比較結果について報告する。

§ 2 調査概要

東京の新宿駅近くに通うB女子大学(東京都渋谷区)学生394名(造形学部の1~4年生,服装学部の1年生)を対象に、防災知識および意識等に関するアンケート調査を実施した。具体的な構成および内容は前報¹⁾とほぼ同様で、「回答者の属性」「地震・防災の知識」「地震・防災の意識」「大学内で地震災害に遭った時の防災対応力」「家庭で地震災害に遭った時の防災対応力」の5分野である。

回答者の居住形態は、実家68%、一人暮らし19%、学生寮8%、その他5%である。

§ 3 地震・防災に対する意識及び知識

日頃の地震防災に対する考えや関心度合や言葉の理解・認知度合から、意識と知識の程度を把握する。地震防災に関心があるかを質問した。結果を図1に示す。

約6割の学生は地震防災に関心があり、比較的高い関心度が得られている。きっかけは、「TV・本・新聞」などのメディアによるものと、「阪神大震災」など過去の地震被害が多く回答された。次に、自助努力の認知度の結果を図2に示す。9割の学生が自助努力を認知していない。

さらに「ライフライン」「マグニチュード」等の意味を質

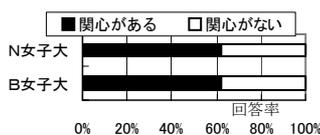


図1 地震防災への関心度

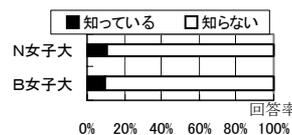


図2 自助努力の認知度

問した結果を図3に示す。ここでは市民調査の結果²⁾についても併記した。「ガス・水道・電気」が正解であるが、「人命救助のための救急体制」と回答した学生が多く、正解率は28%である。「マグニチュード」は正解率が半数を超え、比較的高く認知されていた。また、非常持ち出し品の準備状況や家具固定の実施度は両大学とも全体的に低く、同様の結果であった。

§ 4 大学近辺で地震災害に遭った時の防災対応力

都心の20階建てを校舎に使用しているB女子大学近辺で地震に遭遇した場合の行動について質問した。在校時に震度6強の地震が発生したと想定し、教室(19階、5階)、校舎の前、エレベーター内、地下1階の食堂の5箇所について質問した。結果の一部を図4、5に示す。

19階の教室にいた場合は、「机の下に入る」という回答が6割以上であり、次に「避難階段に行く」という回答が挙げられた。5階の場合も19階の場合と同様であるが、低層階であるため「外に出る」という回答が増えている。

校舎前にいた場合は「建物(学校)から離れる」と回答した学生が3割と一番多く、「その場にしゃがむ」などの回答もみられた。

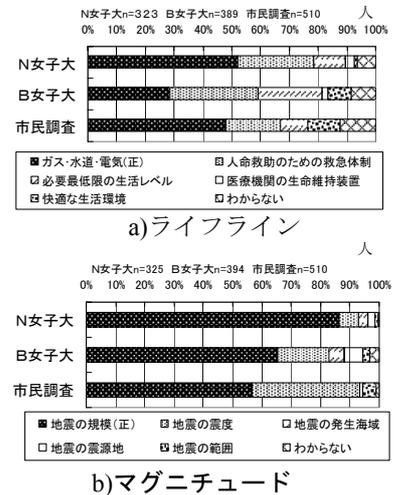


図3 専門用語の意味

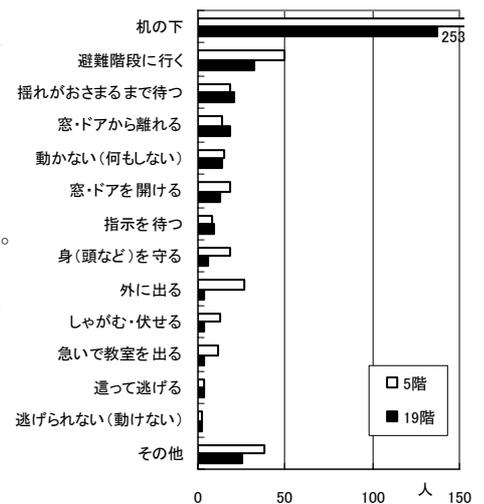


図4 教室(19階、5階)にいた場合

Study on Education for Disaster Prevention to Improve People's Ability to Cope with Earthquake Disaster
—Part 7 Earthquake Recognition and Disaster Prevention Action

among University Students Going to a Campus in the Center of Tokyo—
YAMAGUCHI Yuko, HISAGI Akie, ISHIKAWA Takashige and IMURA Noriko

エレベーター内にいる場合、「とにかく外に出る」「緊急ボタンを押す」という回答が多いが、「何もしない」「あきらめる」などの回答もみられた。

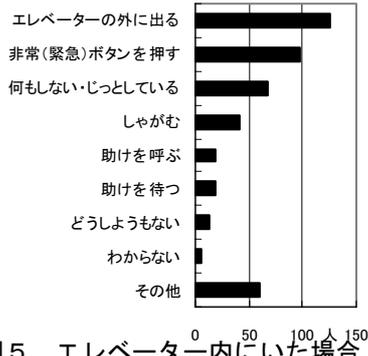


図5 エレベーター内

また学内で安全だと思う場所、危険だと思う場所について質問した。学生は地下および最上階の渡り廊下の空間を危険だと認識し、中庭や体育館などを安全だと理解していた。

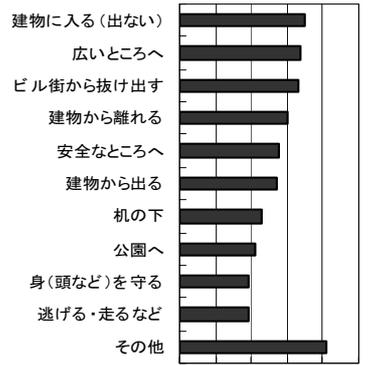


図6 新宿ビル街

さらに登下校時で新宿ビル街にいた場合、地震が発生した時の行動に関する調査結果を図6に示す。

建物内を安全だと感じている学生と、建物が危険だと感じている学生に二分されているため、回答がばらつく結果となっている。

なお、B女子大学の一時避難場所および広域避難場所(渋谷区)の認知度の結果をそれぞれ図7に示す。

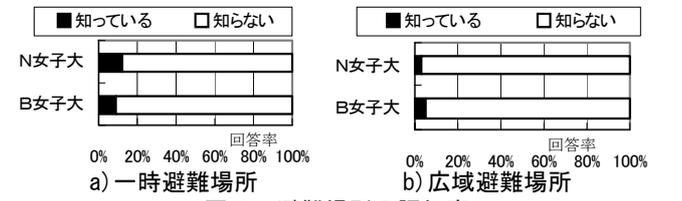


図7 避難場所の認知度

一時避難場所も広域避難場所も認知度は低く、本人が知っているとも認識していても間違えている場合もあった。

なおB女子大学では2004年度より学生手帳に地震災害緊急対応マニュアルが記載された。学生の携帯率が高い手帳のため、効果が期待されるが、現状では認知度が3割と低いため、認識を高めることが今後の課題であろう。

また大学在校時に地震が起こった場合の対応で、知りたいことを質問した結果、「知りたいことがある」と回答した学生が約7割であった。知りたい内容として具体的に挙げた項目を図8に示す。

一番多かったのは「安全な避難場所がどこか」ということである。また「大学(校舎)は丈夫なのか?」という、建物の耐震性を気にした回答も多くみられた。B女子大学の高層建物は築7年の制震構造であるが、その建物の安全性がわからないため、不安を感じている学生も

少なくない。高層建物のどこが安全な場所かを知りたいというコメントも多くみられた。

§5 地震後の帰宅時における意識と行動

大学在学時に地震が発生した場合の帰宅経路や家族への連絡方法について質問したところ、「話したことがない」という回答が6割と多かった。

2003年にB女子大学で実施した調査³⁾の結果、在学時に被災した場合、帰宅困難者となる学生が非常に多いことがわかった。

次に「帰宅困難者」および「自宅までの帰宅ルート」を知っているかについての調査結果を図9、10に示す。

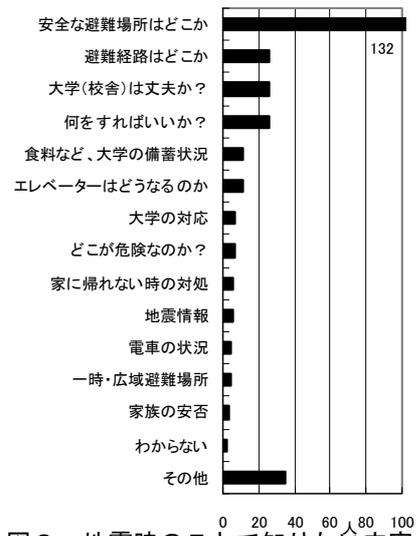


図8 地震時のことで知りたい内容

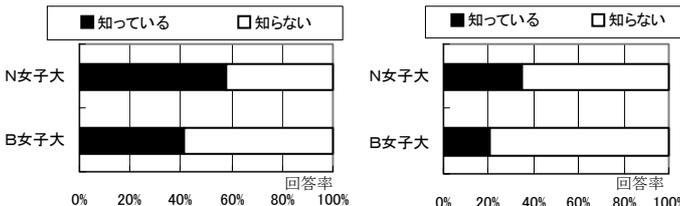


図9 帰宅困難者の認知度 図10 帰宅ルートの認知度

帰宅困難者は約6割の学生が知らないと回答し、帰宅ルートも約8割の学生が認知していない結果となった。自宅までのルートを知っていて、道路事情に問題がない場合でも、帰宅に3日以上かかる学生も多く、地震の発生時間次第では、帰宅困難者の大量発生が予測される。

§6 おわりに

都心に通う大学生は、地震防災への関心度は高いものの、知識は全体的に十分とはいえない結果であった。首都直下型地震の発生確率も高まっており、いつ、どこで大きな地震に遭遇するかわからないのが現状である。自分の身を守るための知識を持ち、正しい行動が出来る学生であることが期待される。

調査にご協力頂いたB女子大の学生の皆様に深謝する。

【引用文献】

- 1) 後藤裕美, 石川孝重, 伊村則子, 他: 都心キャンパスに通う大学生の地震防災に対する認識と行動に関する研究-その1 アンケート調査の概要と地震防災に関する知識-, -その2 地震・防災に関する意識と体験に注目した分析-, 日本建築学会大会学術講演梗概集(都市計画), pp. 441~444, 2004年8月.
- 2) 東京大学社会情報研究所廣井研究室: 災害関係調査報告書, <http://www.hiroi.isics.u-tokyo.ac.jp/index-houkokusho/-rist.htm>, 2003年2月25日.
- 3) 久木章江: 大地震時の帰宅困難者の経路選択に関する調査-新宿通学者へのアンケート調査結果に基づく分析-, 日本建築学会関東支部研究報告集(都市計画), 7025, pp. 297~300, 2003年度.

*1 元文化女子大学
 *2 文化女子大学住環境学科 助教授・博士(学術)
 *3 日本女子大学住居学科 教授・工学博士
 *4 武蔵野大学環境学科 講師・博士(学術)

*1 Student, Dept. of Dwelling Environment, Bunka Women's Univ.
 *2 Assoc. Prof., Dept. of Dwelling Environment, Bunka Women's Univ., Ph.D.
 *3 Prof., Dept. of Housing and Architecture, Japan Women's Univ., Dr. Eng.
 *4 Lecturer, Dept. of Environmental Sciences, Musashino Univ., Ph. D.